

「くんち」があることは唐津というまちにとってどういうことか —〈唐津の人〉のエスノメソッドに着目して—

石倉未帆

1. はじめに

本研究の主題における「くんち」とは、佐賀県唐津市で毎年 11 月に行われる「唐津くんち」という祭りのことである。

人は普段、自分にとって当たり前の事柄を意識することはない。しかしある拍子に、一体なぜそれが自分の当たり前になっているのか疑問を持つことがある。

【福岡の知人との会話より】「唐津出身の友人に、『今日佐賀に帰るの?』と聞いたら、『唐津!』って言われた。そこ訂正する必要ある?」

なぜ唐津出身者は「佐賀」じゃなくて、「唐津」です。」と言うのか。他人から違和感を表明される経験により、それ以外にも自分達の間でのみ“通用する常識”や“わかる感覚”が存在することに気付いた。そしてそれは、特に唐津くんちに関する話題において顕著であった。このような常識や感覚は一体何なのだろうか。このことについて考える際、くんちの話は抜きにできないようである。

2. 本研究における問題の見立て方

「佐賀じゃなくて、唐津です。」この言葉は一見、地元に対する誇りや愛着の表れとも解釈できる。これまで、まちへの愛着は住民の行動や態度に影響を及ぼしうるものとして、その形成要因を明らかにすることを目的とした研究が多くなされてきた。その中で祭りの存在は人々がまちに愛着を抱く理由の一つとして挙げられるだけでなく、まちのコミュニティを維持する装置として近年その仕組みに注目が集まっている。こうした研究では、「コミュニティへの参加」といった【A: 人間の態度・行動】と「まちへの愛着」といった【B: 人間の意識・関心】と「祭り」などの【C: 操作可能な環境】がそれぞれ独立した要因として想定され、【A】を促進しうるものとして【B】と【C】が、さらに【B】を促進しうるものとして【C】が想定されるという構図をとる(図1)。

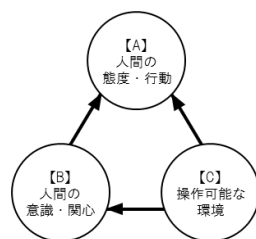


図1 相互作用的構図

本研究では「佐賀じゃなくて、唐津です。」という言葉をまちに対する誇りや愛着の表れとしてではなく、「まちを生きる」という出来事全体の一側面とし

て現れた現象と捉える。そして、言葉そのものというよりもそれが現れてくる過程に注目するという点でこれまでの研究とは異なる。

3. 「〈唐津の人〉のエスノメソッド」とは

本研究では、「唐津市民」や「唐津出身者」等言い換え可能な場合と区別する目的で「〈唐津の人〉」という表現を用いている。つまり〈唐津の人〉であるということは、想定されたある範囲の集団や共同体に関する出来事について「何が起きているか見て言える(=説明可能である)」ことであり、その集団や共同体に所属しているか否かということを目指してはいない。これはエスノメソドロジー(以下EM)における“メンバー”の考え方に基づく。EMとは、それぞれの実践に参加している人々(メンバー)が使っている「人々の方法論」であると同時に、それを通して実践を記述する研究の名前である(前田ほか, 2007)。出来事の説明可能な性質は、個人的な実感や経験だけでなく複数の人にとって自明の事柄、つまり共同でわかって利用できるものである。本研究ではEMにおけるこの“人々の方法”のことを「エスノメソッド」(南, 1996)と呼んでいる。

4. 目的と方法

本研究では〈唐津の人〉のエスノメソッドにアプローチすることにより“くんち”のある唐津というまち”を捉えることを目的とする。〈唐津の人〉にとって自明な事柄の内実を明らかにする際に肝心なのは「日常を生きる」中に「現れる」現象を掬い集めることである。このとき最も重要となるのは、〈唐津の人〉の“内”と“外”両方の立ち位置をとることが可能であるという、研究者としての筆者の立ち位置である。生まれてから18年間を過ごした後唐津を出た筆者は、出来事に対して〈唐津の人〉の内に立って説明することが可能であるのに加え、〈唐津の人〉の外に立って外部者的な見方をとることも可能である。

次章以降では筆者がこれまで〈唐津の人〉として参加した出来事の場面、雑誌インタビューからの引用など、今回改めて採集したものや過去の出来事を想起したものを含めた記述を行う。

5. 唐津くんちの曳山¹を所有する町の人々

唐津くんちの曳山（ひきやま）は単に“ヤマ”と表現する場合もある。曳山巡行に参加する“曳子（ひきこ）”は、ヤマを所有する町内の在住者か、町に認められた町外者に限られる。また、ヤマのある町の人々を取り巻く環境は特殊である。まず、町内は曳山組織が中心となって、一年を通してくんち関連の行事がある。くんちが近づくと、あちこちで練習の始まったお囃子が聞こえてくるようになり町全体のテンションが日に日に上がっていく。盆正月には帰らない者でもくんちには必ず帰ってくるという。彼らにとってのくんちがどのようなものなのか、以下、ヤマのある町の者の言葉を引用しながら示す。

5.1. 仕事を休んでくんちに帰ること

【友人 S との会話より】「職場の人たちは、たとえば USJ に行きたいけん休みをもらう時に、上司には別の理由を言うんよね。『ちょっと所用があつて…。』とか。でも私、普通に『くんちなんで休みます。』って言ったけんね。」

ヤマのある町の者がくんち関連で仕事を休んでまで唐津に帰ることは珍しいことではない。もちろん、くんち当日に帰ってくる曳子がいなければ祭り自体が実行できない。しかし S の話しぶりからは、くんちを理由に仕事を休むことへの後ろめたさは全く感じられず、むしろ当然と思っていることがうかがえる。

5.2. ヤマを曳くこと

例えばくんちの前にけんかをすればヤマを曳かせてもらえない。また、女性の曳子は「中学生まで」とする町や、全く曳くことができない町等様々である。

【『ぶちトラ』インタビューより】「見るだけの人はそれで楽しかつちやろうけど、おいはヤマば曳く楽しみば知つとるけん、見とるだけはいっちゃんおもしろなか。がば、つまらん！がば、悔しか！て、ヤマば見ながらマジで泣きよつたですもん。やっぱ、くんち前にわるそしたらいかんです（笑）」

【友人 S との会話より】「（女性の曳子は中学生までという）あの決まりは結構残酷。」（曳けなくなって）辛かった。今も曳きたい。」

くんちをただ見るだけでは物足りないという思いが表れており、曳子にとってくんちで自分が「ヤマを曳く」ということの重要性と代え難さがうかがえる。

6. ヤマのある町の外の人々

筆者の実家のある場所は、くんちが近づいてもお囃子を練習する音が届くはずもなく、町の様子はそれ以外の時期とほとんど変わりはない。そこで起こった出来事を以下に記述するが、参加していた主な者として、大学時代に県外で一人暮らしを経験し現在は唐津に居住する筆者の友人 O と H（いずれも筆者の幼稚園～中学あるいは高校までの同級生）、8 歳年下の弟を中心とした筆者の家族らが挙げられる。

6.1. くんちを見に行くこと

(1) 花火大会デートよりもくんちデートが上

筆者「前に他県出身の友達が、『彼氏とデートするなら花火大会がやっぱ憧れだな』って言って、唐津も花火大会はあるけど、くんちが一番憧れやない？そういう話をしたら、花火大会よりくんちが上なんだ！って驚かれた。」

O「えっ、断然くんち…！うちはくんちが憧れやった。」

H「うん。私も。」

筆者「それね、理解してもらえない。多分普通じゃないよ。（笑）」

O「えー…！」

(2) 普段着では行きたくない

10 月のある日、実家にいる弟から LINE のメッセージが届いていた。「どうしょ！」の一言だけで、一体何事かと思つたが、次の一言で合点がいった。「くんちの服ねえー」。普段服に無頓着な弟だが、どうやら福岡にいる筆者に、自分がくんちに来て行く服を買って来てくれと言いたいようだ。

くんちに着ていく服をどうするか悩むのは不思議なことではなく、中高生の頃、わざわざ福岡方面や佐賀方面まで服を調達しに行く友人も少なくなかった。

(3) くんちの日に学校は

唐津くんちの日程は毎年 11 月 2 日～4 日と決まっているため、暦によっては 4 日が平日になる。この場合、生徒の多くが筆者のようにヤマと関係がない小学校では曳子の生徒のみ欠席扱いだが、ヤマのある町のほとんどを校区内に有する T 小では全校振替休日とする。同校においてくんち周辺の日程調整は年間行事予定を決定する作業にすでに組み込まれている。

このように曳子の生徒は学校や部活動を免除されるのだが、それ以外の生徒にとってくんちに行けるか行けないかということは大問題である。くんち期間中の休日に部活動の公式試合等が入っている場合、くんちに行くのは諦めるほかない。筆者の弟は昨年度のくんち期間中、公式試合がない代わり顧問の先生が練習試合を組んでいた。以下は筆者がその話を聞いた時の、母と弟との会話である。

筆者「ええー！？あ、もしかしてその先生、唐津の人じゃないっちゃん？」

母「そうねえ、佐賀の人やったっけ。」

筆者「やっぱりねー。」

弟「くんちの日に練習試合とか、ないわ～…。」

母「お母さんたちの間でもその話出つたよ。試合入ってないっちゃんくんちの日は休みにしてあげんとかわいそうよねって。」

この会話において、筆者も母も弟も、先生は部活を休みにしたり早めに切り上げたりと、生徒がくんちに行けるよう配慮をしてくれても良さそうなものだと思っている。そして筆者は、その先生は〈唐津の人〉のことをまだよく知らない人なのだ、という考えに至り、それでは仕方ないと納得している。

(1)～(3)の出来事から、曳子として参加する必要のない〈唐津の人〉にとっても、くんちに行くということが相当に特別なことであることがうかがえる。唐津では程度の差はあっても多くの子どもがくんちに行くことを楽しみにしており、大人たちはこのことを理解しているし、当然理解しているものと期待されていることもわかる。今年4日は平日であったが、弟の通う高校は振替休日であった。何の振替かと聞くと、「そんな、どっかの土曜とかに授業入れればどうとでもなるやろ。」と返ってきた。ずいぶん寛容な措置のように思われるかもしれないが、くんちの日が休みになるならば、生徒にとって“普通の”土日に学校に出てくるくらい大したことはないこと、その方が授業の効率もよくなることが想像でき、これは学校にとってとても合理的な判断であると言える。

6.2. 唐津で育つこと

(4) E 幼稚園の曳山パレード

筆者が年中のとき、通園バスの運転手のおじさんが制作した鯛曳山の模型が幼稚園に寄贈されたことがきっかけとなり、園児たちも曳山を作って園の周りを曳くことになった。これは現在「曳山パレード」という名で E 幼稚園の恒例行事となっている。図 2 は弟が通園していたときの曳山パレードの様子である。



図 2 曳山パレードの様子

(5) 弟の曳山ごっこ

筆者の弟は幼い頃から唐津くんちの曳山が大好きで、その熱狂ぶりは筆者ら家族も呆れるほどであった。実家では唐津くんちのビデオや曳山のポストカードなどの土産物が、弟の玩具として存在していた。図 3・4 は、弟が“一人曳山ごっこ”をしている 3、4 歳頃の写真である。

居間の椅子をヤマの台車に、缶バケツを太鼓に見立て、自分は(どこから引っ張り出したかわからない)風呂敷のようなものを頭に巻き(鉢巻のつもり)、割りばしの笛を吹いている。椅子のはしっこに座る様はヤマの囃子方そのものである。椅子の前面には、引っ張るための紐(引き綱)までついている。さらに椅子の上には、赤獅子の人形を乗せている。当時は、何か一人で盛り上がっているな、と見てみるとこりやまた、すごい…。と思った記憶があるが、筆者も曳山ごっこに混ざれ、と言われることはなかった。本当に弟一人で、あ～えんや～えんや～えんや、えんや！えんや、えんや！…と延々盛り上がっているのである。今考えてもよく飽きないものである。

この場面について、筆者を含め家族全員が、弟が「曳山ごっこをして遊んでいる」ことや、この状態のどの部分が何を表しているのかについて理解できている。また、この場面が「すごい」「よく真似をしている」様子として写真に残されている。



図 3 囃子方の真似 図 4 引き綱を持ち「えんや！」のポーズ

(6) 赤獅子の曳山人形

曳山ごっこをする弟とともに、木彫りの曳山人形が写っている(図 3)。実際に台車も動くようになっているが、この曳山人形はもともと唐津で子ども用の玩具として売られているわけではない。この大きさであれば 1 万円はするはずの、実はかなり高価な贈答品である。弟はよくこの赤獅子を曳き回して遊んでは度々ひっくり返していたため、耳と角の部分は早々に取れてしまっている(図 5)。この赤獅子について筆者は、曳山が好きな弟のために誰かが買い与えたのだらうと思っていたのだが、実は出産祝いであった。以下はその事実を知った時の筆者と母の会話である。



図 5 赤獅子の曳山人形(現在)

筆者「でも、なんで赤獅子？」
母「その頃は、あの大きさの(曳山人形)は赤獅子しかなかったとよ。」
筆者「いや、そうじゃなくて、なんで出産祝いに曳山人形よ。その、赤獅子をくれた人はヤマ曳いてる人なの？」
母「うん違うよ。」
筆者「じゃあなんでだろう。」
母「そりや、子どもはみんな曳山が好きやけんてー！」
筆者「ええ…？」
母(笑いながら)「当たり前ー。先生やけんそんなくらい知つとらすさ。曳山好かん子なんておらんやろうもん。」

「出産祝いで」曳山人形をもらった、ということに筆者は驚いた。誤解を防ぐため断っておくが、決して「唐津では生まれた赤ちゃんに曳山人形を与える」「しきたり」があるわけではないはずである(そんな話は聞いたことがない)。唐津市で小学校の教員をしている母の「先生だから、子どもが曳山を好きなことは知っているよ」という発言から贈り主も同職であることが推察される。「子どもはみんな曳山が好きだからだよ」「曳山を嫌いな子なんていないでしょう」と

言った時の母は、「何をわかりきったことを聞くのか」といった口調であった。「本物の曳山」と「本物の唐津くんち」を知っていて初めて、この人形が「あの唐津くんちの赤獅子」のミニチュアとして意味を持つはずである。曳山人形は唐津において決して“外していない”出産祝いであった。

(4)～(6)の出来事から、たとえヤマのある町から離れたところであっても、唐津において子どもがくんちを知らずに育つことが想定されていないこと、唐津で曳山を嫌いな子どもはいないと考えられていること、曳山が「〇〇レンジャー」等と同様に子どもが熱中する対象となり得るものとして認知されていることなどがわかる。唐津では図6のステッカーを貼っている車を見かけることがあるが、〈唐津の人〉でないとこれが「赤ちゃんが乗っています」の唐津版であるということが認知できないはずである。



図6 ステッカー

ここで筆者が強調したいのは、唐津において弟のような子どもの様子は、決して“標準”ではないが、かと言って大騒ぎするほど“滅多にない珍しい”ことでもなく、“十分有り得る”こととして経験されているということである。筆者もその他の家族も基本的には弟のすることを放っておいている。曳山ごっこをする弟の写真は実家を探し回りやっと見つけたものであるし、赤獅子の曳山人形は筆者が自分で片づけたことさえ覚えていなかった。

7. 総合考察

7.1. 唐津に“あった”ものへの注目

奈良での大学時代、部活に所属していた筆者は、11月の初めに開催される学園祭において1・2年の間は模擬店を運営するという役目があった。チヂミを焼きながら、ふと「今日は11月3日か」と気付くと、「ああ、今唐津では唐津くんちがありよなあ、みんなくんちに行ったかな」など自然に考えてしまう。しかし、この場で筆者以外に「今日は唐津くんちだ」などと思っている人などおそくない、ということに気付くと、目の前の光景が急に嘘のように思えてきた。

唐津を出て新しい土地に慣れていき、支障なく普段の生活を送っている筆者がこの時抱いてしまった違和感は、唐津に当たり前に「あった」ものが今居る場所には「ない」、という表現が最も当てはまる感覚であった。唐津くんちというモノとしての祭りがないだけでなく、いろいろなものを含みこんで「ない」感覚である。そうしてみると、本研究の出発点である「佐賀じゃなくて、唐津です。」という言葉は、〈唐津の人〉の「唐津に何が『あった』のかわからないが、他の場所には『ない』ことだけはわかるのだ」、という状

態を表していたように感じられる。つまり、ここに「ない」ことの対比として“あった”ものに注目することとなった。そして本研究で明らかにしようと試みた、唐津に“あった”ものとは、これまで記述してきた一つ一つの現象である。

7.2. 「くんち」があることは唐津というまちにとって

(1) “あった”ものが“ない”状態への反動

これまで当たり前に「あった」ものが「ない」状態に置かれた〈唐津の人〉は、唐津にいたときよりもくんちを意識しているようである。唐津ではくんち期間中は盆や正月と同じかそれ以上に帰省者が多い。くんちの前後にはFacebook上で〈唐津の人〉による投稿が増える。くんちに行った友人らの投稿に筆者は「いいね！」を押す。Hは「早く来年のくんちにならんかな～」と早くも来年が待ち遠しいようであった。コメントを読めばくんちが楽しみで仕事どころではなかった者、写真を見て行きたくなったという者もいた。周到な用意をしてまで外部の者をくんちに誘うこともある。これらは、「ない」状態への反動のように、「あった」ものが確かに存在することを確認しているかのような印象を受ける。

筆者「でもさ、唐津くんち行こうよって言っても、友達、行く気になってくれる？(笑)」
H「それは、前々から仕込みをね。まず、唐津くんちっていうのがあるんですよ。言っついて、で、100日前になったら…『もうすぐだね！行こうよ！』みたいな。」

(2) 「要因」ではなく「支えるもの」

唐津くんちや〈唐津の人〉にとって自明な事柄の存在が、何かを引き起こす「要因」ではない。つまり、くんちの存在は自明な事柄の存在を支え、それが〈唐津の人〉に経験される日常＝唐津というまちを支えているのではないだろうか。自分たちに自明な事柄の存在を自覚したことにより何か目に見える変化が起こるわけではないだろう。しかし自覚していないよりは、何か変化が起こった時、どう対処すればよいか考える際のよすがとはなるはずである。

引用文献

- シアンデザインメント(編). ぶちトラ vol.9. もしも、唐津におくんちがなかったとしたら…。(2009年10月発行)
シアンデザインメント(編). ぶちトラ vol.13. 昭和の唐津くんち忘備録。(2011年10月発行)
前田泰樹・水川喜文・岡田光弘.(2007). エスノメソドロジー:人々の実践から学ぶ. 新曜社.
南 博文.(1996). エスノメソドロジー:自明な世界の解剖学, 135-154. 発達の理論-明日への系譜. ミネルヴァ書房.
南 博文.(2006). 環境との深いトランザクションの学へ:環境を系に含めることによって心理学はどう変わるか?. 環境心理学の新しいかたち, 3-44. 誠信書房.
山ロー一郎.(2002, 2012). 現象学ことはじめ:日常に目覚めること<改訂版>. 日本評論社.

ⁱ 唐津くんち最大の呼び物は、一番曳山「赤獅子」から十四番曳山「七宝丸」まで、いずれも勇壮華麗な14台の曳山巡行である。

ⁱⁱ 『ぶちトラ』は年2回発行のフリーマガジンで、4月下旬発行の春夏号は有田陶器市を特集、10月下旬発行の秋冬号は唐津くんちもしくは唐津を特集した。(2005年秋創刊号～2015年春最終号)